

ロバート・ゴダード

北田絵里子/訳

Robert
Goddard
Blood Count

血の裁き

上

講談





講談社文庫

血の裁き(上)

ロバート・ゴダード | 北田絵里子 訳

講談社

【著者】ロバート・ゴダード 1954年英国ハンプシャー生まれ。ケンブリッジ大学で歴史を学ぶ。公務員生活を経て、'86年のデビュー作『千尋の闇』が絶賛され、以後、現在と過去の謎を巧みに織りまぜ、心に響く愛と裏切りの物語を次々と世に問うベストセラー作家に。『隠し絵の囚人』（講談社文庫）でMWA賞ペーパーバック部門最優秀賞を受賞。他の著書に『還らざる日々』『遠き面影』『封印された系譜』（すべて講談社文庫）など。

【訳者】北田絵里子 1969年生まれ。関西学院大学文学部卒業。英米文学翻訳家。主な訳書は『ソングライン』（英治出版）、『ギリシャ棺の秘密』（共訳）（角川文庫）、『遠き面影』『封印された系譜』『隠し絵の囚人』（すべて講談社文庫）。

ち さば
血の裁き(上)

ロバート・ゴダード | 北田絵里子 訳

© Eriko Kitada 2014



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年6月13日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277848-0

目次

血の裁き
(上)

5

(下巻 訳者あとがき／北田絵里子)



講談社文庫

血の裁き(上)

ロバート・ゴダード | 北田絵里子 訳

講談社

BLOOD COUNT

by

ROBERT GODDARD

Copyright © Robert and Vaunda Goddard 2011

Japanese translation rights arranged

with INTERCONTINENTAL LITERARY AGENCY LTD.

through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

目次

血の裁き
(上)

5

(下巻 訳者あとがき／北田絵里子)

血の裁き
(上)

●主な登場人物（上下共通）

エドワード・ハモンド 外科医

ケイト ハモンドの妻（故人）

アリス ハモンドの娘

ビル・ダウラー ケイトの兄

アラン・ケンダル ケイトの生前の愛人

ドラガン・ガジ セルビアの民兵組織の元リ

ーダー

イングリッド・ウルタード・ガジ ガジの娘

スヴェトザル・ミヤノヴィッチ ガジの元主

治医

マルコ・ピラヴァーニ ガジの元会計係

グイド・フェルトリーニ ピラヴァーニの元

共同経営者

ジネタ・ペロヴィッチ ガジの元情婦

ゴラン ジネタの弟

モニール ガジとジネタの息子

ブランコ・トドロヴィッチ ガジの元側近

ラドミロ・ウゼラッチ 経済金融不正調査委

員会（ICEFA）の捜査官

ステヴァン・ヴィダー 旧ユーゴスラヴィア

国際刑事裁判所（ICTY）の通訳

マルセル・デルモット ルクセンブルクの弁

護士

ハンス・フルグラール 国連職員

「やつと休暇がはじまる」エドワード・ハモンドは胸の内ですぼやいた。炭酸入りのミネラルウォーターをちびちび飲みながら、会員専用ラウンジの広い窓の外にぼんやりと視線を据え、滑走路を誘導されていく航空機を眺める。灰色に沈んだ二月の午後、のヒースロー空港では、胸躍る眺望は望めないものの、ハモンドの視界にはオーストリアのスキー場がひろがっていた。新聞を見るかぎり、ゲレンデの状態は申しぶんなく、まさにオーバーグルグル名物の極上のパウダースノーが待っているらしい。

ピーターとジュリーはすでにオーストリア入りしていて、二週間の休暇の真つ最中だ。ハモンドは前夜にジュリーと電話で話し、ふたりがその旅行にソフィーという友人も誘っていたことを初めて知った。どうやらまた、仲を取り持つつもりらしい——ケイトが死んでからの十三年間に、ジュリーがハモンドに新しい妻を見繕みつくろおうと試みたのは、これが初めてではなかった。ソフィーとのあいだに何かが起こる可能性はなきにしもあらずだが、ハモンドに関して言えば、結婚という見通しはまったく持つて

いなかった。

五十二歳の男として、平均以上の外見をしている自覚はもちろんあった。体型を保つ努力は怠らないし（たとえば、プールを二十往復するなど）、現実には女性にもてた経験も多々ある。富と社会的地位のおかげで、だれからも理想的な相手と見なされる。けれどもハモンドは、夫という身分になることを望んでいなかった。ケイトとの結婚生活とその唐突な幕切れが、永続的な関係を新たに築くのを躊躇させていた。愛娘のアリスはいま大学一年生だが、再婚したいなら反対はしないと事あるごとに言っていた。「パパが幸せになつてくれたらそれでいいのよ」そしてハモンドは、いまでも幸せだといつも答えたし、おおむねこう思っていた——「そこそこには」幸せだと。

かつて精神科医の友人がこう言つた。人間の精神状態というのは、覚えておくべきことと忘れるべきこと、制御できることとできないことを取捨選択する能力に左右されるのだと。それはハモンドが従おうと努めてきた教えだった。アルプスのスキー場のコンディションのほか、ハモンドが新聞の紙面で探していたのは、見出しで出くわすことになるかもしれないある名前だった。だがその名前は見あたらなかった。ハーグで続行中のはずの審理は、いまのところメディアの注目に値しないようだった。おかげで、待ちに待った休暇のはじまりを、ハモンドは素直に喜ぶことができた。けれども、それは長くはつづかなかつた。自分で気づきもしないうちに、喜びのと

きは終わつた。間近でこう呼びかけられた瞬間に。「ドクター・ハモンド？」

目をあけると、長身で体の線が美しい、はつとするほど魅力的な若い女性が目の前に立っていた。肌はエキゾチックな褐色で髪は黒く、ぴったりに黒いドレスときらびやかな宝石を身につけ、胸の谷間を大胆に見せつけている。片方の手に飲み物のグラスを、もう一方の手に機内持ちこみ用の鞆を持つてゐる。これに微笑みが加われれば非の打ちどころのない美女と言えただろうが、どういうたぐいの美女であれ、彼女は微笑んでいなかった。その正反対だ。微笑みなどそう簡単に浮かべるものかという顔つきをしている。

「ちよつといいかしら」訛^{なま}りがあつた——スペイン系だな、とハモンドは察しをつけた——かすれ気味の英語にくるまれてはいたが。

「ええ、どうぞ。以前に……」彼女はハモンドの隣の空いた椅子に腰をおろし、鞆を足もとに置いた。グラスの中の氷が崩れる音に合わせて、イヤリングの輪^{フープ}が揺れてかすかな音を立てた。「以前にお会いしましたか？」こんな女性が患者にいたなら覚えてゐるはずだとハモンドは思った。しかしまったく記憶になかった。

「お見かけしたことはあります」彼女は飲み物——香りからするとブランデーか——に口をつけ、ハモンドのグラスの横にそれを置いた。「でも、お話ししたことはありません。いままでは」相手の息遣いが浅いことにハモンドは気づいた。理由は想像も

つかないが、緊張しているようだ。

「わたしを見かけたというのは……どこで？」

「ベオグラードで」咳払いをする。「十三年前に」

「そうですか」ハモンドは無関心を装って言った。内心では、どこでもいいから彼女が言った以外の場所と、ほかの時期であつてくれたらと思ひながら。一九九六年の春にベオグラードへ赴いたことは、できることなら思い出したいくない事実だった。その地でハモンドが治療した患者は、いまハーグで審理を受けている。その罪の数々は、ハモンドが責めを負うところでは決してない。それでも……「よく覚えていないな……あのときのことは」何気なく微笑みながら言う。

「わたしの名前はイングリッド・ウルタード」ガジよ、ドクター・ハモンド」彼女は静かに言った。「ドラガン・ガジの娘です」

ハモンドが言葉に詰まることはめつたになかった。すらすらと安心させる言葉を紡ぎ出す才能は、診察室で役立つ取り柄のひとつだ。しかしその才能はいま、どこかへ消えてしまっていた。単純に、言葉が出てこなかった。このまま黙っているわけにもいかないことはわかつていたけれど。「ああ、なるほど。そうか。それで……」

「あなたが入ってくるのを見て、自分の幸運が信じられなかった」

「幸運？」

「問題を抱えてるの。大きな問題を。つまり、わたしの家族がね。助けが要るのよ。だれか……信頼できる人の助けが」

「お父さんが病気なのかい」そうだと言われてもハモンドは驚かなかつたろう。もつとも、去年の逮捕以来、そういう事実は一とことも報じられていなかったけれど。

「いいえ。元気よ。ひどいところにいるけど。それでも……大丈夫」

「だったら、どんな……」

「窓際へ行きましょう」イングリッドは窓のほうを顎で示し、近くで会話を交わしている人々を意味ありげに見やった。彼女の促したその場所のほうが、人に聞かれる危険が少ない。そしてハモンドもそうした安全を望むであろうことを、相手は明らかに確信していた。

「わかった」

立ちあがって窓際へ移動した。ふたりのぼんやりとした影が、両者とのつぺりした灰色の空とのあいだに漂うなか、その空へと飛行機が緩慢に上昇していった。しかしハモンドの思考に緩慢なところは微塵みじんもなかった。すでに気まずく、このあとますます気まずさを増すであろう対決から逃れる道を、せわしく模索していた。ベオグラードへ行つたのは過ちだった。法外な報酬を受けとったけれど、その金の行方をいま口にするにはできなかつた。ハモンドはつねに、患者がどんな人間かは無関係だと考

えてきた。しかし心からそう信じてはいなかった。その患者がガジである場合、どうしてそんなふうに見えるよう。

「これからどこへ向かう予定なんだい」できるだけ長く平静なそぶりを保つべく、ハモンドは尋ねた。

「マドリードよ。おじとおばがあちらにいるの。自宅へ帰る前に会いに行くのもいいかと思つて」

「じゃあ自宅はどこに？」

「ブエノスアイレスよ。父はアルゼンチンにいたところに母と結婚したの。もしかして父からその話を聞いてない？」

「いや。聞いていない」そればかりでなく、のちにガジが旧ユーゴスラヴィア国際刑事裁判所によつて起訴されることになる、迫害や、追放や、投獄や、財産没収や、集団虐殺についても聞かされていなかった。そういうことをガジは話さなかった。そしてハモンドも尋ねなかった。

「あなたはどちらへ行く予定なの、ドクター・ハモンド？」

「オーストリアヘスキーをしに」

イングリッドは黙りこんで、窓の外へ目をそらした。それからハモンドにしつかりと注意を戻した。「お気の毒ね」

「何が？」

「ここでわたしたちが出くわしたこと。わたしにとってではよかった。あなたにとってはあまりよくなかった」

「と言うと？」ハモンドは聞きまちがいかと思った。だが、そうでないことはわかっていた。そして、この出会いは偶然などではない気がしはじめていた。

「あなたにしてもらいたいことがあるの。父のために。わたしの家族のために」

「わたしが力になれるとは思えないが」

「何をお願いするのかまだ言っていないわ」

「ああ。しかし、見てのとおり、わたしは休暇で出かけるところだから」

「いいえ、ドクター。ここにいてもらうわ。イギリスに」

「どういうことかな」

「悪いんだけど」

ハモンドはイングリッドの目をまともに見つめた。「ほんとうに力にはなれない」

「どんな頼みなのかだけでも聞いてもらえない？」イングリッドはハモンドの腕にふれた。「時間はとらせないわ。聞くだけ聞いてちょうだい。お願い」

やんわり懇願するその口調と、内なる好奇心の疼き^{うず}に、ハモンドは屈した。とりあえず話は聞こう。そのうえでことわればいい。「わかった。聞こう」